事例を読む

カメがつなぐ

―幼稚園と小学校のあいだ―

神戸佳子

●カメ発見

ある日のこと。六年生の子どもたちがカメを手にして教室に駆け込んできた。

「先生、カメがいた。体育館のわきに」

息せき切って報告する子どもの手にはカメ。教室にあった水槽に入れてみると、予想以上に元気に動き出し、心配そうに見ていた子どもたちもほっと安心した。

それにしてもこのカメはいったいどこから来たのだろうか。子どもたちの疑問は私の疑問でもあったが、おそらくどこかのクラスで飼っていたものが逃げ出したのであろうと想像して、小学校の先生方にその旨を問い合わせた。

しかし、飼い主は簡単に見つかるであろうとの予想に反して、どこからも名乗りがなかった。

クラスの子どもたちは、生き物係を中心にして、カメの世話をしていた。だんだんに愛着がわいてきて、水槽の中に陸地と池を作り、餌を工夫し、ついには「かめきち」という名前まで付けた。

●スピーチがつなぐ

そうして、数日がたったであろうか。二年生の担任から、附属幼稚園のカメではないかとの声が出た。というのも、そのクラスの朝のスピーチで、

「私の弟の幼稚園でカメがいなくなりました。ずっと探していますが、まだ見つかりません」

「弟さんの幼稚園は何という幼稚園ですか」

「お茶の水です」

というやり取りがあったのだという。

早速、附属幼稚園に電話をすると、何と、カメが一匹行方不明になりずっと探していたのだという。念のため、幼稚園の先生に確認してもらうと、間違いなく幼稚園のカメであった。

いったいどんな道を通って幼稚園のカメが小学校にたどり着いたものか、想像は膨らむが、何より、幼稚園の子どもたちが一生懸命探した気持ち、そして小学校の子どもたちがかわいがっていた気持ち、それらをつなぎたいというのが、幼稚園の先生と私たちの一致した思いだった。

そこで幼稚園の子どもたちに迎えに来てもらうことにした。

●お迎え

お迎えの時。幼稚園の子どもたちは小学校の校庭を通って六年生の教室に向かっていた。それを見つけた六年生は幼稚園の子どもたちを取り囲むようにして教室に案内した。

途中で小学校一年生の子どもも、何か楽しそうな様子に心惹かれて一緒についてきた。

教室では生き物係の子どもが、見つけた時の様子、どんな餌をあげたか、水槽の中に岩を入れたことなどを少しずつ話した。でも、名前を付けたことはなかなか口にしない。

幼稚園の子どもたちは話を聞きながらおずおずとカメに手をのばし、やがて、うれしそうに甲羅をなで始めた。甲羅の横を持ってカメを持

ち上げるころには、すっかり自分たちのカメに戻ったようで、
「チュウ、いたんだ……」
といったような声も聞かれるようになった。
その時、中心になって世話をしていたA君が
「チュウっていうんだ」
とつぶやいた。
A君の言葉には少しさびしさが感じられた。それでも、にこにこしている幼稚園の子どもたちの顔を、こちらもにこにこしながら見ていたA君はさらっと、
「小学校では『かめきち』って呼んでたんだ。でも『ちゅう』が本当の名前なんだね」
と言った。
「そういえば、あなたたちが幼稚園にいたころもカメがいたわね。あれ？　このカメかもしれない……」
幼稚園の先生のこの一言で、六年生の顔が一段と輝いた。
「うん、うん、カメがいた。でもこれかなあ？」
「カメは長生きするからそうじゃない？」
そんな話の輪の中には附属幼稚園出身ではない子どもたちもいたのだが、その子どもたちも自分のことのように熱心に、うれしそうに話しているのが印象的だった。
六年生の子どもたちは、その瞬間、自分の幼稚園のころを思い出していたのではないだろうか。その思い出は個別のものでありながら、生き物を育てたり友だちと一緒に何かを一生懸命やったりした時の心の動きには共通するものがあり、それが「カメ」の存在でその場で共有されたような気がした。そして、それはその場の幼稚園の子どもたちへの共感ともなったようである。カメと別れるのはさびしいけれど、それ以上に幼稚園の子が喜ぶのがうれしい。そんな気持ちがわいてきた六年生だった。

●送っていくね

カメは無事、幼稚園の子どもたちの手に渡り、幼稚園に帰ることになった。六年生は当然のことのように幼稚園の子とカメを囲んで校庭を歩いて行った。

幼稚園と小学校の境目の門が近づくと、誰からともなく、

「じゃあね。ばいばい」

「カメ、元気に育ててね」

等の声が出た。

「かわいかったね」

というつぶやきはカメのことを指したのか、幼稚園の子を指したのか、つぶやいた本人もわからなかったのかもしれない。

（お茶の水女子大学附属小学校）